メロディー“展示”による記憶の想起と生産――福島市古関裕而記念館

星野 幸代

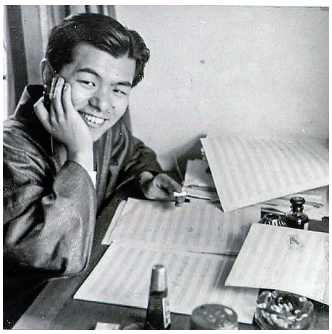

図1　古関裕而　自宅書斎にて　1941（昭和16）年
（古関正裕氏提供）

はじめに

古関裕而（こせきゆうじ）（1909（明治42）–1989（平成1）図1）は、約5000曲の応援歌、校歌、国民的ヒット歌謡曲を作った昭和を代表する作曲家の一人である。昭和40年代までの生まれの人ならば、テレビ番組「オールスター家族対抗歌合戦」（フジテレビ、1972–1986）の審査員だった“古関先生”の柔和な笑顔が浮かぶだろうか。

1 古関裕而の生涯

銀行員から作曲家へ

古関裕而は福島の老舗であった呉服問屋「喜多三」に生まれた。小学校時代には、大正の『赤い鳥』創刊に始まる童謡運動の影響のもと、教諭から熱心な音楽教育を受け、親に卓上ピアノを買ってもらって既に作曲を始めている。福島県立福島商業高校に在学中も、欧州から楽譜を取り寄せてクラシック音楽の研究に没頭した。卒業後は川俣銀行（現・東邦銀行川俣支店）に勤務しながら福島ハーモニカ・ソサエティおよびレコードコンサートの会に所属し、独学で作曲・編曲を試みるうちに、舞踊組曲『竹取物語』が英国ロンドンのチェスター音楽出版社の作曲コンクールに入選、それをきっかけに1930年、上京してコロムビア専属の作曲家となった。

軍国歌謡の作曲家として

当時、同じくコロムビア専属であった古賀政男が「酒は涙かため息か」（1931）等いわゆる「古賀メロディー」で一世を風靡していた。古関はフランス印象派やストラヴィンスキーの音楽に傾倒しており、流行歌の作曲で苦戦したが、「船頭可愛や」（1936）のヒットでようやく認められるようになった。間もなく日中全面戦争に突入し、クラシック音楽を日本の民族音楽と融合させた古関の作風が、「戦争への大衆動員を主眼に国民の精神高揚のために有効に発揮される時代」となる（菊池清麿、102頁）。「勝ってくるぞと勇ましく」と日の丸の旗を振って出征兵士を見送った「露営の歌」（1937）、兵士を乗せて戦地へ向かう船を見送る際に歌われた「暁に祈る」（1940）、これらの悲壮感溢れるメロディーは、戦時下のひとびとの胸に響いた。「若い血潮の予科練の　七つ牡丹は櫻に錨」と、当時「ヨカレン」と呼ばれた海軍航空隊予科練習生を讃える「若鷲の歌」（作詞：西條八十、歌唱：霧島昇・波平暁男、1943）は23万枚の大ヒットとなり、神風特別攻撃隊はこの歌の合唱の後、飛び立っていったという。

平和の時代のメディアに乗って

戦後昭和40年代に至るまで、傷痍軍人が上野駅前など繁華街でアコーディオンを弾いて物乞いをする姿が見られたが、その際に演奏されたのはしばしば「露営の歌」、「暁に祈る」であり、古関裕而は胸を痛めたという。彼は、敗戦後の日本の猥雑、悲惨さの中で淡い夢と光が見えるような歌謡曲を追求するようになる。戦災児童を描くラジオドラマの主題歌「とんがり帽子」（1947、後述）、戦争の傷跡を残す社会派ラジオドラマ「君の名は」（1952）[1]のテーマ音楽、純愛物語に重点を置いた松竹映画『君の名は』の主題歌（1953）は、古関裕而の作曲家イメージを再生していった。今日に至るまでNHKスポーツ中継のオープニングで流れている「スポーツ・ショー行進曲」（1949）、さらに1964年東京オリンピックの組織委員会から依頼を受

けて作曲した入場行進曲「オリンピックマーチ」等は、テレビが娯楽の重要な部分を占めていた昭和期においては、国民的音楽として浸透していったといえるだろう。また、プロ野球で「阪神タイガースの歌」通称「六甲おろし」(1936)、巨人軍の「闘魂込めて」(1938)、全国高校野球の歌「栄冠は君に輝く」(1948)はいまだに歌われており、古関が校歌、応援歌を作曲した高校、大学は、実に36都道府県にまたがっている。いわゆるゴジラシリーズの特撮映画『モスラ』(1961)から『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』(2003))にいたるまで小美人が歌っている「モスラの歌」は、日本の平成生まれの世代だけでなく、Mothra's songとして海外でも親しまれている。

2 「とんがり帽子」の記念館

古関裕而記念館は、東に「となりのトトロ」の歌「さんぽ」のモデルとなった信夫山(しのぶやま)——この地名は「早苗とる手もとや昔しのぶ摺(ずり)」と『奥の細道』にも詠われている——を望み、市の音楽堂敷地内に1988年建設された。[2]

同館の建物は「みどりの丘の　赤い屋根　とんがり帽子の時計台」とはじまる「とんがり帽子」(作詞:菊田一夫)をイメージしている(図2)。この曲は、GHQの部局CIE(民間情報教育局)の勧告によりNHKが製作した、戦争孤児の救済をテーマとする連続ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」(1947年7月5日–1950年12月29日、全790回)のテーマとして作曲された。第一回は生放送で古関裕而が弾くハモンド・オルガンに合わせ、音羽ゆりかご会[3]の子どもたちが歌った。このドラマは大人気となり、放送時間の17時15分近くになると子どもたちが遊ぶのをやめて家に帰ったという。

同館の一階部分はサロンとしてミニ・コンサートの会場として利用されている。二階がメインの展示室であり、吹き抜けには透明アクリルにネオンの「とんがり帽子」、「白鳥の歌」(作詞:若山牧水、歌唱:藤山一郎、1947)の楽譜の一部が配され、天窓の光を受けている(図3)。

「記念室」には、古関裕而が作曲をする際に35年間使っていた書斎が再現されている(図4)。古関はそのピアノもオルガンもない部屋の、畳に置かれた座卓で楽想を練った。大きな座卓が三つ寄せて配されており、作曲依頼が重なった際には、古関はその三卓に五線紙を幾枚も並べ、数曲を同時進行で作っていたという。

来場者がよく足を止めていたのは、主な古関メロディー100曲の視聴コーナーである。初対面らしき人々が、聴きながら話を弾ませていたのが印象的であった。

図2　福島市古関裕而記念館外観(福島市提供)

図3　古関裕而記念館2階ネオン（2018年9月8日撮影：星野）

図4　古関裕而記念館2階「記念室」（2018年9月8日撮影：星野）

図5　古関金子（古関正裕氏提供）

3　企画展「『栄冠は君に輝く』生誕70年」

2018年8月5日–9月2日には、全国高等学校野球選手権記念大会が第100回を迎えるのに合わせ、企画展「『栄冠は君に輝く』生誕70年～甲子園に響け！古関作品・校歌」が開かれた。企画展では直筆の「栄冠は君に輝く」楽譜（作詞：加賀大介）、レコード（歌：伊藤久男、日本コロムビア）のほか、歴代優勝校のうち三重県立四日市高校（1955年夏大会全国優勝）の応援歌「希望の門」（作詞は同校出身の小説家・丹羽文雄）はじめ、古関が作曲した応援歌・校歌の自筆楽譜、また古関の母校である福島県立福島商業高校の甲子園初出場の際の記念品が展示された。

4　愛知県豊橋市との縁

古関裕而の妻となった内山金子（きんこ）（1912–1980、図5）は、愛知県豊橋の人である。

内山金子は父・安蔵、母・みつの三女として豊橋市で生まれた。家業は陸軍に物資を納入する業者であったという。金子は活発で音楽と文学が好きな少女で、豊橋高等女学校（現在：豊橋東高等学校）に進んだ。

二人の交際は、上述の古関作曲『竹取物語』が英国のコンクールに入選したという報道を金子が新聞で読み、楽譜が欲しいとファンレターを古関に送ったことに始まる。そのころ金子は名古屋市中区御器所（ごきそ）で働きながら声楽の勉強をしていた。二人は四カ月ほど文通し、古関裕而が豊橋へ金子をたずね、1930（昭和5）年6月二人は上京して電撃結婚した。翌年には帝国音楽学校（1930設立–1944廃校）に入学した金子を気づかい、古関は同校のあった世田谷代田（だいた）に転居している。金子は、三浦環と同門のソプラノ歌手ベルトラメリ能子（よしこ）（1903–1973、もと国立（くにたち）音楽大学教授）に声楽を本格的に学んだ。古関裕而の低迷期には彼に請われて、歌をマイナーレーベルのレコードに吹き込んだこともある。1949–50年、古関がオペラを創作する機会を得た際に、彼は『朱金昭』等3つの作品を金子に捧げ、上演に当たっては山口淑子［李香蘭］、藤山一郎といった大スターにならんで金子がキャスティングされた。古関裕而、金子は互いの音楽性を理解し、高め合った夫妻であったと言えるだろう。

5 ふるさとの誇りとしての古関メロディー ～そしてYuji Kosekiへ

1979年、福島市は古関裕而作曲生活50年を機に、ふるさと福島を広く紹介してきた功績を認め、古関裕而を名誉市民第1号として推戴することを決定した。1991年からは、福島市古関裕而記念音楽祭を開催しており、2018年で第28回を迎えている。

福島市内ではあちこちで古関メロディーを聴くことができる。福島駅では新幹線ホームの出発時に「栄冠は君に輝く」が、在来線ホームでは「高原列車は行く」[4]が響く。福島駅前のハモンド・オルガン[5]を弾く古関裕而のモニュメントや、各所にある時計塔などから時報とともに古関メロディーが流れる。

古関メロディーは、戦時、敗戦後の日本、昭和を想起させる。ただそれにとどまらず、昭和の流行歌、曲も、福島市が街をあげて反復する「展示」によって、保存されるだけでなく次世代に記憶され、想起されるようになる。さらにテレビ、映画、YouTubeを通じて今日も次世代に、また国際的に受容される曲もある。Yuji Koseki原曲のMothra's song／摩斯拉之歌から、国内外の若者が新しい意味と記憶を生産していくのだろう。

協力　古関裕而記念館学芸員・氏家浩子氏

1｜ラジオドラマ「君の名は」は放送時刻の木曜8時になると、銭湯の女湯が空っぽになったといわれる伝説的な人気を博し（菊池清麿、183頁）、映画化されると主役・真知子を演じた岸恵子のストールの巻き方「真知子巻」が流行った。

2｜「古関裕而記念館周辺地図」平成28年1月20日改正版、福島市古関裕而記念館。

3｜1933年、東京の文京区護国寺で作曲家・海沼實が児童の情操教育のために創設した児童合唱団。歌手・由紀さおり（1948－ ）、川田正子（1934–2006）らを輩出した。品川区戸越に移動して現在に至る。

4｜「高原列車は行く」（丘十四夫作詞、古関裕而作曲、岡本敦郎歌、コロムビア、1954）。同年年末の第五回紅白歌合戦で、白組の最初に歌われた。（菊池清麿、325頁）

5｜Hammond Organは1934年ローレンス・ハモンドが考案したオルガン。金属歯車の磁界とコイルの電磁誘導による揺らぎのある音を特徴とする。

《参考資料》

菊池清麿『評伝　古関裕而　国民音楽樹立への途』彩流社2012

国分義司、ギボンズ京子『古関裕而1929／30　かぐや姫はどこへ行った』日本図書刊行会2014

古関裕而『古関裕而自伝　鐘よ、鳴り響け』主婦の友社1980

齋藤秀隆『古関裕而　うた物語』歴史春秋社2010

「「栄冠は君に」誕生70年展　古関裕而記念館」『朝日新聞』〔福島版・深津弘記者〕2018年8月14日

「四日市高　開け「希望の門」　幻の応援歌20年経て復活」『朝日新聞』〔三重版・嶋田圭一郎記者〕2012年1月19日

古関正裕〔古関裕而長男〕「今日は古関金子の命日」2014年7月23日、「歌とトークの新感覚ライブユニット「喜多三」のブログ」http://www.usuyukisou.com/kitasan/index.php/blogs/archives/30　最終アクセス2019年1月14日

福島市公式ユーチューブ「古関メロディが流れる街―福島市―」https://www.youtube.com/watch?v=5kw4l2OHSVw　最終アクセス2019年1月4日

福島テレビCX「昭和を彩った男・古関裕而」1999年